支倉徒然
はせくらつれづれ

～ セピア色の風景 ～

「冠婚葬祭②」

青田　茂雄
仙台建設業協会専務理事

田舎で冠婚葬祭を自宅でやっていた時代の最後は、私の長姉が嫁いだころだと記憶している。昭和40年代の前半である。

そこそこの数のお客が来るので、かなりの数のお膳、徳利、盃、箸、お椀、皿をはじめ、座布団や冬場に暖をとるための火鉢などが蔵に収納されていた。足りない分は、隣近所との貸し借りとなる。

そのため、使う前にどこどこ宅のものか、姉さん被りに白割烹着の母ちゃん方が確認し合っていたし、各家庭で持っているものは、伝統的なもので変わらないため、ベテラン母ちゃん方は、確認もせず催し後の片付け時には、家ごとに食器がざるに仕分けられていた風景を思い出す。料理に使うざるやボウルなどには、各家庭の名前が書いてあった。

いくら家が大きい田舎とはいえ、座敷に一度に座ることができる人数には限界があった。そこでお祝い事のときは、お客さんには時刻をずらして案内し、「一番客」「二番客」と称して、二度にわたって食事を提供した。従って、その入れ替えのときの慌ただしさは、大変なものだった。

食事の計画、物の貸し借り、一番客と二番客の仕分け、また酒飲みを覚えたわが身から察すると、いい気分になり居座ろうとする一番客のさりげない〝追い出し〟など、隣近所との付き合いを含め、当時の親たちの気苦労、気遣いに思いが至る。

「絆」などという言葉こそなかったが、一人だけでは生きられない、一軒だけでは暮らしてはいけない、当たり前のお互いさま精神が、冠婚葬祭に流れていた。

●あおた・しげお　1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める